

中世禅宗における義雲の立場

原 田 弘 道

一

永平寺五世義雲（一二五三—一三三三）の、中世禅宗における立場について若干の考察を試みる。

臨済宗に対する態度、中国禅宗に対する態度、日本禅宗に於ける立場といった三点を柱として、その思想行実、就中思想的立場を中心に検討を加え、その把握を通して、もって中世禅思想史理解の一助としたい。

なお既発表の論文中に取り上げてあるいくつかの問題は重複を避けるため、及び紙副の関係で小論では取り上げないことをあらかじめおことわりしておき、御諒解を得ておきたいと思うのである。

(1) 「初期曹洞宗と義雲の立場」『宗学研究』一五号、「永平寺五

世義雲の立場」『印度学仏教学研究』二二卷、二号。「中世曹

洞禅の一考察」『駒沢大学仏教学部研究紀要』二三三号。

正安元年（一二九九）陰曆九月十三日、薦福山宝慶寺開山寂円は示寂した。後席を継いだ義雲はこの時四十七歳であった。住すること十五年、正和三年（一三四）、吉祥山永平寺四世義演の示寂の後を受けて、永平寺五世として住持位についた。正慶二年（一三三三）八十一歳で遷化するまで十九年住持としてその職にいた。宝慶寺、永平寺二会三十四年、特に永平寺にあつては「大破滅法」のあとをうけて、道元禪と諸堂伽藍の復興に尽瘁した。世に永平中興の祖と称されたのである。龍堂の『義雲和尚略伝』はその盛況活躍ぶりを、会下千衆を下らなかつたと表現している。⁽²⁾

会下は法嗣の曇希（一二八八—一三三）をはじめ円宗、空寂、慈元、寛海等、参学の徒には瑩山紹瑾、懷暉等の名が今日伝えられている。

当時の曹洞宗は、永平、宝慶、大慈、永興、大乘、永光、円通、総持、光孝、宝應、放生、淨住等の諸寺院があり、北越加賀が中心になつて行われていたことは周知の如くであるが、その隆盛さにおいては、圧倒的に臨済宗であつて、来朝僧、入宋入元僧の活躍によつて賡らされたものである。臨済宗は、京都に建仁、東福、南禪、三聖、万寿、興國、鎌倉に建長、円覚、淨智、壽福の諸寺、九州その他崇福、龍翔、長楽、興禪、雲巖の諸寺があつた。

義雲在世当時來朝した中國僧の主な人は、兀庵普寧一二六〇（一一九六—一二七七）、大休正念一二六九（一一二八九）、西磯子曇一二七一（一二四九—一三〇六）、無学祖元一二七九（一二三六—一二八六）、鏡堂覺円一二七九（一二三四—一三〇六）、一山一寧一二九九（一二四五—一三一七）、清拙正澄（一二七五—一三四〇）、竺僊梵仙（一二九三—一三四九）等である。入宋・入元日本僧では心地覺心（一二三七—一三一七）、南浦紹明（一二三五—一三〇九）、寂室元光（一二九〇—一三六七）、孤峰覺明（一二八七—一三六一）、愚中周及（一三三三—一四〇九）、古先印元（一二九五—一三七四）、石室善玖（一二九四—一三八九）、中巖円月（一三〇〇—一三七五）等がおり、曹洞宗では來朝僧に寂円、入宋入元僧に寒巖義尹（一一三〇〇）、徹通義介（一二三三—一三〇九）、宗可禪人等がいる。

当時臨済宗で光彩を放つていたのは、南浦紹明、法嗣の宗

峰妙超（一二八二—一三三七）、関山慧玄（一一七七—一三六〇）、七朝の帝師夢窓疏石（一二七五—一三五一）、永源寺派の祖寂室元光、月林道暁、石室普玖、別源円旨（但東明嗣）等であるが、聖一派及び法燈派の兼宗禪と大覺派の宋朝禪、更に応・燈・閔の日本禪へと移りつつあつたのである。その発展の背景には、皇室や幕府の帰依や庇護があり、その影響實に絶大なものがあり、これを無視することはできないのである。⁽³⁾

このような時代にあって、義雲は独立自治的立場にあって曹洞禪を挙揚したのである。⁽⁴⁾ 寂円に参隨すること二十年、永仁元年四十三歳（一一九五）にして内面的自己同一性を獲得し、その堂奥を得て法を開演し、寺門再興經營にも積極性を示していたのである。やがて人の認める所となり、曹洞下と法燈派との交渉は初めから密接なものがあつたが、他の臨済派の禪者も多く参じたことが想像される。これは曹洞宗の臨済下への参学ぶりからも容易に首肯し得る所と考えられる。果して蘭溪道隆（一二一三—一二七八）の弟子であつたとも云われる義尹の法嗣、肥後大慈寺二世斯道紹由との交渉、大応下の月堂宗規（一二八五—一三六一）、中巖円月（一三〇〇—一三七五）等著名な禪者が参じたことが知れる。月堂は筑前の人で永平寺で西堂を務めていたことが、「送^ミ宗規西堂帰^ニ関^シ」⁽⁵⁾『義雲和尚語錄』上によつて明らかである。『東海一漁集』で知られる中巖円月は、「中巖和尚自歴譜」文保二年、戊午（

三八一）の項に、「冬到越前。參永平義雲。略通洞宗語言」⁽⁶⁾と十九歳から二十歳まで永平寺にいたことが知れる。中巣はそれより二年前、正和五年（一一一六）に來朝僧宏智派の東明慧日（一二七三—三四〇）について、

象外、援予於東明和尚。扣以洞下之旨。然予、心粗不能達其密意。⁽⁷⁾と曹洞宗旨を学んだが理解できず、義雲について始めて通じたとある。

このように臨濟宗との交流が見られるのであって、当然のことながら、義雲には日本臨濟宗に対する批判は見当らない。

のみならず、道元禪師（一二〇〇—一二五三）が極力否定している見性の語を用いていることである。即ち、『義雲錄』上に、

永平見性不_レ同_ニ声聞_ニ不_レ同_ニ菩薩_ニ不_レ同_ニ三大老漢_ニ諸人著_レ眼見取⁽⁸⁾。

と、また『義雲錄』下には、

況又相_ニ逢_ニ佛祖正伝_ニ稀_ニ於_ニ優曇華開_ニ須_ニ救_ニ頭燃_ニ弁道_ニ。応_レ知_ニ坐禪_ニ門便直指人心見性成仏之西來意也。勸_レ君尋常坐_ニ蒲团上_ニ身心脱落⁽⁹⁾。

の二箇所に見える。もつともこれは、「就中坐禪一行、三昧中王三昧也。祖師西來不_レ務_ニ余事_ニ。面壁打坐而已」⁽¹⁰⁾（『義雲錄』上）とあるからして、只管打坐を前提とする坐禪觀に立脚した「見性」の意味であって、その内容は修証隔別の公案功夫

による「見性」とは全く趣きを異にしたものである。

このように臨濟禪に対しても融和的であるのは、瑩山禪師（一二六八—一三三五）が「近代、我此宗門之中、遍歷ノ參徒、大錯ル事多端也」（『洞谷開山瑩山和尚之法語』）としながらも、

自家の門人は曰く、南嶽の門下は劣なり、青原の宗風は勝れりと、又臨濟門下は曰く、洞山の宗旨は、すたれたりき、臨濟門下にたすけらるると、いずれも宗旨くらきがごとし、自家他家もし実人ならば、ともにうたがふべからず、ゆへいかんとなれば、青原、南嶽、ともに曹谿の門人、牛頭の両角のごとし（『伝光錄』⁽¹¹⁾）

と眞実人における洞済同位性を説き、更に、

しるべし臨濟門下も尊貴なり、自家門下も超邁なり⁽¹²⁾（『伝光錄』）とする洞済融和的立場と通ずるものであろう。そしてこれはまた、義雲のみならず、同時代の峨山韶碩（一二七五—一三六五）の「山雲海月」「峩山和尚法語」、明峩素哲（一二七七—一三五〇）の「明峩仮名法語」、大智祖繼（一二九〇—一三六六）の「大智偈頌」「大智仮名法語」「十二時法語」、通幻寂靈（一三三二—一三九二）の「通幻禪師語錄」等にも同様に臨濟批判が見えないと一般である。

このように日本臨濟宗に対する義雲の立場は曹洞宗に於いて特別の立場を維持するものではないが、逆に臨濟宗には曹洞宗を貶下した言葉が見える。それは抜隊得勝（一三三七—一三八七）が峨山の会下を評したものであるが、彼に明極楚

俊（一二六一一三三六）に学んだ得瓊なる禅者が、「公有宿

習、何披僧衣乎」と質問したのに「吾出家全非為僧衣、只為生死事大」と答え、「還看古公案哉」と質問されれば、「吾

自心未明、爭就于他言句求耶」と答えて從来の伝統、權威を否定する自由な立場に立っている。その彼が、⁽¹³⁾

嗚呼、曹洞宗旨雖不背理、会下久參上士、皆落理路。臨濟玄宗未

夢見、在山若証明之。曹洞宗旨私底尽矣。其後山謂曰。我雖有証

明。小師未曾一人至我脚下、師聞之笑点頭而已。⁽¹⁴⁾

と曹洞宗が皆理路に落ち、臨濟の玄宗を夢見ざるものであり、自分の脚下にも至ることが出来ないと批判し、自己の優位性を強調している。獨介独善の性向の人のようにあって言葉通りに受けとれない面も存するが、自派の優位性を強調しているのと際立つた対象を見せてはいるのである。批判は批判として謙虚に受けとめねばならないが、臨濟宗の圧倒的優位下における曹洞宗の立場が伺えると同時に、包容的にしてゆとりのあるおらかな性格が当時の曹洞宗に存していた事を見落してはならないであろう。

(1) 世にいう三代相論によつて、熾烈な内部紛争の結果、永平寺

は四代義演が報恩寺に移つて無住となつてはいた。伽藍と法灯は危殆に瀕していた。

(2) 「時師六十有二歳。槌払之下頗不減三千衆。家風峭峻諸方憚レ

之」『義雲和尚語錄』卷之下、(『曹洞宗全書語錄』一、四一頁)

(3) 拙稿「永平寺五世義雲の立場」『印度学仏教学研究』二十二

卷二号、二二二頁以下参照。

(4) 拙稿「初期曹洞宗と義雲の立場」『宗学研究』一五号、九二頁以下。

(5) 「義雲和尚語錄」上『曹洞宗全書』語錄一、一九頁。「結夏來兮解夏帰。結來解去似雲飛。道無三方所到家看。西北一

天月一規」。

(6) 『続群書類從』第九輯下、六一二頁。

(7) 同書、六一二頁。

(8) 『曹洞宗全書』語錄一、一四頁。

(9) 『曹洞宗全書』語錄一、二四頁。

(10) 『曹洞宗全書』語錄一、一六頁。

(11) 『伝光錄』『常濟大師全集』一五九頁。

(12) 『伝光錄』『常濟大師全集』一六〇頁。

(13) 佐橋法竜氏『瑩山』二七三頁。

(14) 「甲州塩山向岳庵開山抜隊和尚行実」『続群書類從』九下。

三

さて次に義雲の中国及び中国禪宗に対する態度について見てみよう。

『続曹洞宗全書注解二』に「永平秘密頂王三昧記」がある。

この書は新纂『禪籍目録』には「秘密」の二字がなく、「永平頂王三昧記」とあり、著者は希玄道元、編者は義雲ということになつてはいる。寛永三、四（一六二六、七）年の写本で宗白筆写である。『続曹洞宗全書』本によつてその内容につい

て見ると、五位についての拈提があり、その他、三玄・三関がみられ、五位の用語が至る所に見えること、こういった点からして、『正法眼藏』「春秋」「仏經」卷で機闇や五位を否定している道元禅師の著作とは考えられない。また義雲編とすれば、先老というのは義雲からは寂円に当ると見られることによつても云えよう。

『続曹洞宗全書』注解二に収録されているのは、肥後の聖護寺に伝えられたもので、「世尊拈華微笑」から「雲門超仏祖談餅餉」までの五十三則の公案拈提集で、第一則の「世尊拈華微笑」以外は中国禅僧に関する公案で、これらの公案を先老が拈提し、小師比丘義雲が編述した形式をとつていて。東隆真氏は本書は問題なしとしないけれども、寂円・義雲師資による拈提、編述とされている。⁽²⁾そこで本書について、一応、对中国、対臨済宗観について伺つてみると、当然の事ながら、中国における宋朝禪臨済禪批判は全く見えない。洞山良价については四則とりあげて、その曹洞宗的立場を明確にしているものの、寂円においても洞済の対立意識を持つていなかつたかの如き感を抱かしめられるのである。

中でも道元禅師が称揚している禅者の語が幾人かあげられる。「谿声山色」卷の瑯琊慧寛、「自証三昧」「阿羅漢」の圓悟克勤、「密語」の雪竇重顕等である。⁽³⁾反対に道元禅師が強く批判している大慧宗杲、拈菴德光、臨済義玄、徳山宣鑑のうち臨済の「臨済錄」からの引用が見える。即ち、『義雲和尚語錄』下、永平寺語錄において、「臨済云」として、

夫出家人見解真正。弁レ仏弁レ魔。弁レ凡弁レ聖。弁レ真弁レ偽。弁レ正弁レ邪。仏魔未レ弁。邪正未レ弁。出ニ一家入ニ一家。喚作ニ造業衆生。不ニ是真出家。⁽⁵⁾

次にこの点を義雲自身の「語錄」について伺つて見よう。

『義雲和尚語錄』に引用拈提されている祖錄及び禪者は多数ある。語錄燈史類では主なもので、『宏智廣錄』『如淨語錄』

とあり、出家人の見解に関して臨済の語を引用して、眞の出家人のとるべき姿勢を示している。

道元禅師の思想的立場は宋朝禪の批判超克の上に成立した

ものであるが、一方では中国禅者の参考眼について、宗派を超えて是是非の立場に立っている。義雲は見た如く、中国禪宗一般について公平な立場をとつておらず、道元禪師に見られるような批判は見当らない。従つて義雲においては道元禪師における非非の面が後退して、是是の面が押し出されたものと云えよう。

そこで、義雲は中国人ではなかつたかという疑問が古くから持たれ、一部では行われていた。次にこの問題を考察しながら義雲の立場を明らかにして行こう。

- (1) 新纂『禪籍目録』二七頁。
(2) 東隆真氏「宝慶寺寂円禪師」『金松』一九七七年四月号、三九頁。
- (3) 道元禪師が称揚しているのはこの他に、蘇東坡『谿声山色』、五祖法演『行持』仏性法泰『春秋』等がいる。
- (4) 批判している大慧宗杲は、「説心説性」「密語」「大修行」卷、臨濟義玄「説心説性」「密語」「大修行」、德山宣鑑「大修行」「密語」、この他雪竇重顕「春秋」、趙州、玄沙、仰山、雪竇山明覚、海會端等は、「他心通」「心不可得」。
- (5) 『曹洞宗全書』語錄一、二六頁。

四

□元師蛮は延宝六年（一六七八）『延宝伝燈錄』四十一卷を編したが、卷七に、

越前州永平義雲禪師。宋国人。佩寂円印住宝慶永平（傍点筆者）

と、「宋国人」としており、美濃加納全久院湛元自澄編元禄七年（一六九七）刊行の『日域洞上諸祖伝』卷之上には、
義雲禪師。大宋国人也。隨道元禪師而東渡後。依宝慶寂円和尚而參請。遂受印記。実道元四世之孫也。（傍点筆者）

とあって、宗外臨濟宗と宗内共に「宋国人」と見ている。元禄十五年（一七〇一）の同じ師蛮の『本朝高僧伝』二十五では全然触れておらず、享保十二年（一七二七）の嶺南秀恕の『日本洞上聯燈錄』卷第一では、

越前州永平義雲禪師。洛陽人。縉紳之裔也。以建長五年臘月一産矣。（傍点筆者）

と「洛陽人」としている。寂円について、寂円禪師。支那人也。安貞元年隨道元和尚東渡。元住興聖又遷永平皆從之。（傍点筆者）

と『日域洞上諸祖伝』卷之上にあり、同書の義雲の条と酷似している。また道元禪師の寂年に義雲は誕生しているから随侍して来日することはあり得る筈ではなく、従つて師の寂円の記事と混同して用いられたものであろう。されば、正徳乙未五年（一七一五）の龍堂撰正徳寺本『義雲錄』の「略傳」ではこの点を指摘して、

師諱義雲。以建長五年癸丑之臘月。產于洛陽縉紳之家。（近世僧史戴于師伝皆曰。師大宋国人隨道元和尚之歸朝而來者非也。）

師建長五年産焉。是元祖示寂之年而相_ニ後于帰朝_ニ殆乎二十有七年也。況有_ニ隨遂而来之事哉。失考可_レ知⁽⁵⁾

と否定している。しかし宋国人を否定して「洛陽縉紳之家」としている根拠は示していない。

この宋国人説が出たのは伝記の成立年代順から云えども『延宝伝燈錄』が最初であり、湛元自澄の『日域洞上諸祖伝』卷上が二十年後に受けているが、卍元師蛮は何によつたか不明である。自澄に関しては、天和四年（一六八四）筆写の内閣文庫文『義雲和尚語錄』の原本となつたテキストが、この自澄の所持本であつたとされるが、この内閣文庫本の中に、永平寺の結夏上堂の文章に、

以此頌押韻觀之、雲老似蜀人。⁽⁶⁾

と註記している。これによつて見れば、これが、自澄が義雲を宋国人と見る一つの根拠にしていたようである。師蛮と自澄はどちらがどちらによつたか不明だが、『延宝伝燈錄』と『義雲錄』の原本との間隔が六年しかなく、それ以前から自澄は所持していたと考えられるから、宗内者でもあり、臨濟宗の師蛮が自澄から受けたと見るのが自然ではあるまいか。

さて、古写本『建撕記』の明州本、瑞長本、元文本の各本に義雲自贊の語「亦自贊云」として、⁽⁷⁾

体曾不_レ離_ニ扶桑國_ニ影_ニ普_レ歷遊大宋朝_ニ二老美贊_ニ增_ニ衝天氣_ニ一靈_ニ宛爾_ニ不_レ仮_ニ他功_ニ汝快携來_ニ無孔笛_ニ至今_ニ一

調。々_ニ新豐_ニ日本元德辛未（三年）歲、永平寺五世義雲自贊。（傍点筆者）

とある。また『越前宝慶由緒記』に、
中興禪師永平寺住院時、弟子宗可侍者。中興之書_ニ壽影_ニ渡_ニ唐_ニとあり、『建撕記』に同趣旨の文も見え、宋可禪人が淨慈寺靈石如芝及び靈隱寺獨孤淳_ニ（明）の贊を受けて持帰つた義雲の頂像に、義雲自身自贊を付した言葉の中に、「体は曾つて扶桑國を離れず。影普く大宋朝を歴観す」とあるから、明らかに宋国人説は否定される。

そして明州本、瑞長本、延宝本、門子本等の『建撕記』がそろつて、「建長五年誕生、洛陽人、二五歳ニテ出家ス」としており、洛陽の人であるかどうか、なお検討の余地を残しているとするも、決め手の存しない今日、古伝が一様に伝えているこの説に一応随わざるを得ないであろう。

淨慈寺靈石如芝贊は、

裂_ニ馮掖衣_ニ方袍毳登_ニ選仏心空第_ニ闡_ニ洞上宗風_ニ得_ニ寶慶密意_ニ振_ニ逸格機_ニ弘_ニ大法施_ニ繆_ニ春華於枯木枝頭_ニ耽_ニ霜蟾於夜明簾外_ニ若曰_ニ蔡草現_ニ玉殿瓊樓_ニ吐嗟_ニ起_ニ叢林百癡_ニ紀_ニ其佛績_ニ豐功_ニ是為_ニ中興永平之第一世_ニ。

永平堂上雲和尚絵相、徒弟宗可請_レ贊、因為點筆賜、仏鑑禪師住持抗之淨慈、八十有三歲、靈石叟如芝贊。⁽⁹⁾

とあり、叢林百癡を起し、中興永平の第一世と最大級の贊辞を呈している。靈隱寺獨孤淳_ニ（明）贊は、

早歲掛冠。万縁俱棄。潤飲木浪。水懷麋志。趣向三天。步驟十
地。道。蔭群生德。周品類。赤手。起洞上之派宗。若非乘

願力而再來、又安得廻然而獨異者。

永平禪寺住山雲和尚壽像其徒宗可請讚。泰定改元歲在甲子春、靈
隱山獨孤叟淳明⁽¹⁰⁾。

とその自行化他を大いにたゞえている。これらの事は、後に
も触れるが、義雲及び当時の永平寺にとつては極めて重要な
意義を持つものといえよう。なお義雲を「永平寺中興の祖」
と称するようになったのは靈隱寺靈石如芝に始まると言つて
も良いのではなかろうか。

- (1) 『大日本佛教全書』一〇八、一一九頁。
- (2) 『曹洞宗全書』史伝上、四四頁。
- (3) 『曹洞宗全書』史伝上、二四六頁。
- (4) 『曹洞宗全書』史伝上、二三九頁。
- (5) 『曹洞宗全書』語録一、四〇頁。
- (6) 石川力山氏「内閣文庫本『義雲和尚語錄』『曹洞宗研究員研
究生研究紀要』第八号、三三頁。
- (7) 河村孝道氏『諸本対校 永平開山道元禪師行状建拂記』一二
○頁。
- (8) 『曹洞宗全書』三八〇頁。
- (9) 『諸本対校 永平開山道元禪師行状建拂記』一一八頁。
- (10) 同 一一九頁。

五

寿像持參の使者となつたこの宗可禅人であるが、彼は義雲
の弟子で、命によつて、義雲の真影及び「永平寺再興之由來」
の書を持つ渡唐した人である。この宗可については、二、
三年来、瑩山派下の寂室了光の嗣、中庭宗可と同一人物、即
ち中庭宗可その人ではないかと考えていた。その理由は次の
如くである。享保二年(一七一七)の『重統日域洞上諸祖伝』
卷第一⁽¹⁾及び、『日本洞上聯燈錄』第三の永光寺中庭可禅師
伝に、彼は入唐し、天童山で如淨禪師の塔を挙し、道元禪師
の牌を再雕して祖堂に入れ、明極楚俊に謁している記事が見
える。『重統日域洞上諸祖伝』卷一によれば、

師諱宗可、其号曰中庭。風神峭拔。骨相不凡。翛然有出塵之
趣。迨長遂入洞谷山。從寂室光公供養灑掃之役。已而薙除
鬚髮。學出世法。久之受秘訣。辭航海南遊數十年間。東西兩
浙、江西湖南。兩淮兩廣。所有名山道場。足跡殆將徧焉。然後
登太白。礼淨禪師塔。先是有入迺祖元和尚牌於南谷庵者。
歲久湮沒。師再雕入祖堂焉。尋至婺之雙林。謁明極俊禪師。
俊問曰。汝久參諸老。必有付授。有便呈露老僧。是則与爾証
明。不是則与爾割卻。師展兩手曰。是什麼。俊笑而休。及辭東
歸。俊與法語一篇。既帰寓此陸之故居。未幾補洞谷處。學侶
雲委。師示以本分鉗鎗。不復辭色。於是道價傾天下。後卷⁽²⁾
于酬應而休矣。嗣其法者七人。各拋大方門庭繁衍。

とある。同趣旨の記述が『宝慶由緒記』及び『建撕記』にも見える。明州本『建撕記』には、宗可が天童南谷庵祖廟に奉祀してある道元禪師の牌を新造し、天童楚俊が位牌新造の支証を書き与えた支証の文も並記されている。この支証の文は『明極楚俊和尚語錄』卷三にも見えるものである。⁽³⁾明州本には、

四明大日峰下有_二南谷庵_一者迺天童淨和尚藏骨之塔所、淨和尚、夜夢洞山价禪師相見、次日禪者有_二元公_一、來深明_二洞上宗旨_一、淨將芙蓉楷祖所付法衣竹箆白松寶鏡三昧、五位顯訣密授于元公、得此法_(ママ)竜帰日東本国、開山永平禪寺、興隆洞上之一宗之旨、而從是元禪師道望重於東國、示寂之後、復立位牌於南谷祖堂、歷季既久損滅、其牌今直下子孫有宗可禪人者、逾_レ海遊唐、不忍見其祖牌已滅乃發大心、命_三工刊_一入牌入_二祖堂位_一、非惟憫念祖宗之名泯滅於唐、亦且隆祖道之心功々焉、可謂洞宗之下不之賢花、原夫匝祖元公、_(ママ)訝受法回本国、是符契大法東漸之讖、宗可禪人、遍參大唐諸禪德必亦有所即授、若有便請、呈露于老僧看、是則與你証拏、不是則與你剗却、禪人即展兩手示余曰、是什麼故然其機、拋而且當乃書臣為贈云、

泰定丁卯秋七月望大白闇房老僧楚俊_(ママ)

このように両者は共通しており、『明極楚俊和尚語錄』にも存在していること、当時の日本禪界において、宗可という名の禪者が他に見当らないこと、入元僧の中で他に該当する僧がないこと等で、瑩山紹瑾、無涯智洪、寂室了光、中庭宗可と次第する宗可その人と考る訳である。これはまた当

時の永平寺、宝慶寺派と大乘寺派との交渉を見てもうなづけることである。

即ち瑩山禪師は若年の頃寂円に参じてゐるが、「十八歳にして発心し道を求む。十九歳にして寂円塔主に参じ、菩提心を発し、不退転の位に至る」と『洞谷記』にあり、宗慶寺で維納に充てられていたこと。また、『義雲和尚語錄』のうちの『宝慶寺語錄』の編者円宗、空寂のうち円宗と、『永平寺語錄』に「暉首座遺書到上堂」「為_ニ暉首座_ニ上堂」の「暉」は「懷暉」のことと、この懷暉の両者は共に徹通義介（一二一九—一三〇九）の法嗣であるとする説が『義雲和尚語錄上巻聞解』に見え、「三大尊行状記」及び「尊宿出喪記」に見られることから、この説がとられている。このように両者は宝慶寺と永平寺にあり、宝慶寺、永平寺と大乘寺の両派は交渉があったのであるからして、寂室了光も弟子の宗可を永平寺へ掛塔させ、その間に入唐したのか、あるいは「久之受_ニ秘訣」辞航_レ海南遊」（『重續日域洞上諸祖伝』卷第二）とあるから、了光のもとで秘訣を受けてから辞して入唐する前に永平寺にあつたのではないか、いすれか考えられる訳である。後永光寺に入院している所から、前者の説をとりたいのであるが、いずれにしても上述の如く見るものである。

ところが問題がある。『續日域洞上諸祖伝』も『洞上聯燈』も共に宗可の在唐「数十年」としている。これだと永平

寺に掛塔していた期間が全くないことになつてしまふ。そこで在唐期間であるが、先に掲げた靈隱寺独孤淳爾（明）が宗可に与えた贊は泰定改元元年、日本正中元年（一二三四）である。宗可の持ち帰つた真影に付した義雲の自贊が元徳三年（一二三三）であるので贊の内容から在唐は一応八年と考えられる。しかし『明極楚俊遺稿』に「送可禪人自唐回里」と題して、

故國別經年。為參唐土禪。句明言外意。機透妙中玄、飲食千家鉢。
滄波万里船。眼翻秋水碧、不認万山川。⁽⁶⁾

なる偈がある。これは宗可の帰国に臨んで楚俊が与えたものであろう。但し何時の事かは分らない。元徳三年の一年前の二年（一二三〇）にはすでに楚俊は来日しているので、義雲自贊の元徳三年（一二三三）宗可帰国とするのは無理のような気もする。そこで、楚俊が宗可に与えた前掲の「支証ノ文」及び『明極和尚語録』第三の「日東可禪人回郷」条には共に、泰定印秋七月望の奥付がある。即ち泰定四年（一二三七）の七月十五日である。従つて「送可禪人自唐回里」の偈はこの頃のものと一応考えられよう。宗可が入唐したのは、先の靈隱山独孤淳明の贊の奥付からして泰定元年（一二三四）の春以前である。そこでこの間四年とする『建撕記』の説が一応妥当のようである。

しかし、義雲の自贊の内容から見る限り、やはりどうかと

いう氣がする。義雲が寿像を手にした時の感激、喜びが卒直に表れている。手にして数年を経てから自贊を書したとは考えられない。不自然な氣がする。手にした直後のものと見るのが常識ではあるまいか。そこで宗可是在唐中に楚俊から「支証ノ文」を受けてから、なをしばらく何らかの事情で滞在し、楚俊の来朝に前後して彼も帰国したと考えられぬであろうか。もっともこれは極め手を欠く単なる想像であるが。

しかし、すれにしても「在唐数十年」は否定されて、永平寺掛塔の時間はあつたということだけは云えよう。

(1) 「日本洞上聯燈錄」第三には「能州洞谷中庭宗可禪師。風神
峭拔骨相不凡。迨長出家於洞谷山。礼寂室光公為師。
久之受秘訣。辭航海南遊。數十年間。東西兩浙。江西湖南。
兩淮兩廣。所有名山道場。足跡殆將偏焉。然後登三大白^(太カ)禮
淨禪師塔。先是有入三迺祖元和尚牌於南谷菴<sup>按一本歲久湮
沒。師再彫入祖堂焉。尋謁堂頭明極禪師。俊問曰。汝久參
諸老。必有付授。有便呈露老僧。是則與爾證明。不是則
與爾剗卻。師展兩手曰。是什麼。俊笑而休。及辭東歸。
俊與法語一篇。既歸寓北陸之故居。未幾補洞谷處。雲侶
奔轡。師示以本分鉗錠。不假辭色。於是道價傾天下。
晚倦^ニ應酬^ニ退休矣。嗣法七人。各拋大方。」と伝えてい
る
『曹洞宗全書』史伝上、二七〇頁。)</sup>

(2) 『曹洞宗全書』史伝上、一五七頁。

(3) 大久保道舟博士、『道元禪師伝の研究』一四九頁。「明極和尚語録」三、「日東可禪人回郷」条。「永平仏法道元禪師紀年録」

附、天童俊明極与レ宗可語。

(4) 「洞谷記」『常濟大師全集』

(5) 東隆真氏前掲論文、二三頁。

(6) 『五山文学全集』第三卷、一九七〇頁。

六

このように義雲は永平寺入院十年目にして宗可を入唐せし

めているが、この事はさかのばれば道元禅師の『永平広録』

の問題と関連して考えられることである。即ち禅師の滅後十二年文永元年（一二六四）に門人義尹が禅師の語録を携えて入宋し、瑞巌寺の無外義遠、靈隱寺の退耕徳寧、淨慈寺の虛堂智愚の禅将らに閲覧を請うたとき、瑞巌寺の無外義遠がその広録の中から自分の意に適つたところを抜萃して義尹に与えたものが「永平元禪師語録」である。その義遠の序に、

非_ニ超宗異目、慥暴生寧、峭壁乘崖、孤危嶮施、何足_ヲ以起_ニ納僧瞑眩之疾、邪見枝蔓之根_ニ。在_レ古不_レ乏、居_レ今為_レ誰。太白老人淨禪師、奮然一出、独振_ニ此風。諸方憚_レ之、學者畏_レ之、日本之元公禪師、截_ニ海南來、直入_ニ其室、向_ニ心塵脫略處、喪_ニ盡生涯、帰_ニ坐故山、尽_ニ情評露。其徒義尹、採_ニ撫狐涎、欲_ニ為_ニ序引。則_ニ為_レ之曰。汝師橫說堅說、未_ニ曾動_ニ舌頭、莫_ニ錯認_ニ驢鞍橋、作_ニ阿爺下領_ニ。

景定甲子十一月旦、無外義遠書。⁽¹⁾

と如淨禪師と道元禪師を高く賞揚している。また、義遠、徳

寧、智愚の跋文も同様に道元禅師をたたえている。中でも智愚は「元老則有_ニ超師之作_ニ⁽²⁾」とまで云っている。

このことは何を物語つてゐるのであろうか。遺弟達の師徳顯彰の至高の孝心の発露であろうし、筆者もまたそう信じる。しかし現実には永平寺は内部紛争状態に入りつつあった。義介は正元元年（一二五九）入宋し帰国して永平寺にあつたのである。

道元禅師の在世中は道元禅師の僧團といつてもよい位である。滅後遺弟達は指標を失つて曹洞宗の僧團としての転換の必要にせまられていた。道元禅師から曹洞宗へである。そこで從来道元禅師を通して見ていた宋朝禅に対する再評価とその確認が遺弟達の間で問題になつたのではなかろうか。それは自己の立場の規定につながる問題だからである。これは保守派、革新派にとつても共通の関心事であつたろう。⁽⁴⁾ 義介の入宋帰国によつてこの氣運は高まつたと見てよい。こうした背景のもと望んでか選ばれてか義尹は入宋したものである。義介帰國後二年目の事である。即ちその目的の一つは逆に本場の中國禪者から道元禪がどのような評価を受けるかということではなかつたか。と同時にその証明の権威を求めたのではないか、義尹が語録を携えて諸山を歴訪している所から、そう考えるのである。道元禪の真価は中國からも認められるところとなつたのである。これは以後の永平寺が保守的

路線が堅持されてきた事と深いつながりがあると考えられるのである。

とにかく中国の諸名徳に閲覧を請い、その証明を求めた事は事実である。これと同様、今義雲は永平寺再興十年にして先例に倣つて権威の恢復と法の証明を得る必要があつたのであろう。義雲に對して淨慈寺靈石如芝が「中興永平之第一世」と證明している所に見ることが出来る。

このようなことは曹洞宗においては永平寺以外には見られない特徴である。こゝに永平寺が日本曹洞宗の根本道場としての自覚と立場を堅持しながら、その法の証明と権威の裏付を中國禪宗に求めていたと見る事も出来るであろう。そして他宗派にも見られない永平寺の特殊的立場を物語つているといえよう。

それと同時に、永平下の懷辨、寂円、義演、義雲は伝記による限り、曹洞宗に投じてからは、他流參學の様子が見えず、道元禪師の「一生不離叢林」の姿勢を受け継いできた点が他の法系と異つた際立つた特色として、また日本における立場が自づと浮びあがつてくるのである。

これは義雲においては、

吉祥峯頭不二人間。莫レ作四時遷变看。兀坐寥寥無対待。青山深處白雲閑。

林下幽閑一世貧。無レ由向レ外問ニ疎親。清風白月賓兼生。去就

平常不_レ誑_レ人。⁽⁵⁾

という二首の「山居」の詩によく孤高超然とした自由な境界がよくあらわれている。これは嶺南秀恕（一六七五—一七五二）が『日本洞上聯燈錄』卷一で寂円について、

率性孤硬不_レ近_ニ人情_ニ。不_レ事_ニ垂誨_ニ。端_ニ居太室_ニ。淵默竟_レ日_ニ。⁽⁶⁾

と述べている如く、他出もせずひとり超然と自己の世界にのみ沈潜していく立場を受けつぐものであり、道元禪師の超俗孤高一世貪に通ずるものである。しかしてまた瑩山禪師の「洞谷十境」序にみえる、

僧行火客、俱に梵行を修し、心根塵縁、同じく仏事を作す。運水搬柴も神妙用に非ざるは無く、摘菜採果も尽く是れ妙法輪を轉ずるなり。此の地、本より人間に異なり、此の地、多くは聖跡に似る。且く十名所を題し、將に一山の徳を顯わさんとして、爾云う⁽⁷⁾

（原漢文）

の「人間に異なり」と相通ずるものがあると云えよう。

こういった基本性格のもとの不離叢林の修行生活における義雲の立場は、その坐禅についても、

応_レ知坐禪一門便直指人心見性成仏之西來意也。勤_レ君尋常坐_ニ蒲团上_ニ。身心脱落、兄弟須_レ知。外道二乘。當_ニ坐禪_ニ在。雖_レ然与_ニ仏祖之單伝_ニ天地懸隔。外道以_ニ我我所執故。有_ニ邪見著味之過_ニ。二乘以_ニ自調自度_ニ故。有_ニ涅槃挾滅之病_ニ。所以道。尽屬_ニ情所計_ニ。六十二見本。為_レ甚折伏_ニ二乘外道_ニ趣_ニ向_ニ仏祖正路_ニ。不_レ見六祖云_ニ。一切善惡。都莫_ニ思量_ニ。自然得_レ入_ニ清淨心體_ニ。坦然常寂。妙用恒沙_ニ。⁽⁸⁾

と尋常蒲团上に坐す身心脱落は道元禪師の只管打坐、身心脱落の坐禅の一貫して変らざる立場を継承したものと云えよう。

七

(1) 大久保道舟訳註『道元禪師語錄』四八頁(岩波文庫本)。

(2) 「大海汪洋、眇無涯涘。嘗て一滴則百川異流具此滴中。義尹禪人不不忘乃師之志、持其廣錄、需為較正。得三百千之十一。其權實照用、敲唱激揚具此錄中。猶海之一滴耳。脫略枝葉不立孤危、自成一家。趙州所謂諸方難見易識、我這裡易見難識。予於此老亦云。書雲日 義遠題印」、「巨海風生、千波万浪、變態無窮。今觀日本元禪師語、亦猶是也。若是慣諳水脈、便見淺深波水不異。豈待風恬浪靜、舞棹揚帆於其間哉。倘或未然。却請從頭探過。大宋乙丑咸淳改元清明後一日、靈隱退耕德寧印」

「尹上人、持日本元和尚永平集來。觀其締構、深遠不墮語言。自謂、得天童淨和尚不伝之旨。况此老平時發越皆鐸鑄、昂梅絕出規矩之外。以此見之、元老則有超師之作、撫斯錄者、從而魯變。大宋咸淳改元春三月、奉勅住持京國淨慈虛堂智愚書印印」。

(3) 大久保道舟訳註、同書、一二六頁。

(4) 拙稿「日本曹洞宗の歴史的性格(一)」『駒沢大学仏教学部論集』第三号、一五頁以下。

(5) 「義雲和尚語錄」卷之上、『曹洞宗全書』語錄一、一九頁。

(6) 『曹洞宗全書』史伝上、四九頁。

(7) 「洞谷記」『常濟大師全集』四〇一頁。

(8) 「義雲和尚語錄」卷之下『曹洞宗全書』語錄一、二四頁。

ところが思想的には一方從来指摘されている如く、道元禪師が、『正法眼藏仏經』卷で、

あるひは為人の手をさずけんとするには、臨濟の四料簡、四照用、雲門の三句、洞山の三路、五位等を挙して、学道の標準とせり。師天童和尚、よのづねにこれをわらふていはく、学道あにかくのごとくならんや。⁽¹⁾

と、あるいは「春秋」卷で否定している、機関および、五位の拈提がある。

そこでこれは直接の師である寂円から受けているのであるかという事であるが、義雲は、寂円の三十三回忌陞座で、

此一弁香從胸襟拈出。欲酬恩。恩還如怨。欲報怨。怨亦似恩。超恩超怨。是一本分。上為三日月星辰作光彩。下為三万木百艸作靈根。爇向爐中。供獻先師當山初祖。用酬法乳之恩。⁽³⁾

と報恩の真をさゝげ、また永平寺入寺後の「祝聖龕拈香語」として、「供養薦福開山円和尚大禪師。用酬法乳之恩。」とあり、「仏祖贊寶慶初祖」では、

全相之妙。通身之照。奪得洞山頂上眼睛。透徹吉祥堂奧心要。拋於塵塵三昧座床。暢於利利常說曲調。拈弄払柄。殃及児孫。打雲打水。好一場笑。⁽⁴⁾

と塵々三昧の只管打坐に徹し、吉祥の堂奥に参得し、妙照を得て、雲水を打出すと深くたゞえている。

このように寂円に対する態度が伺える。そこで、次に機関の問題を考慮に入れながら、寂円の祖錄と一応考えられる先にも掲げた『永平秘密頂王三昧記』一巻と『義雲和尚語錄』との関係について概観してみよう。

共通すると考えられる公案は、「世尊拈華瞬目」「武帝達磨不識」「投子青向上一路」「雲巖大悲手眼」「廿二祖摩奴羅偈」等で、しかも内容的には扱いの親和性は見られない。わずかに、「摩奴羅偈」の拈提の語として、

隨_三万境_一心元無_三動相_一鏡像如_レ鑄。転_レ處以即機轉也。即者心之本光也。即者前謂後後謂前。不_レ涉_三照顧₍₅₎……

という文と、「宝慶寺語錄」の最初の正安元年（一二九九）十一月の開堂、拈香、祝聖役の上堂に、

一心隨_三万境_一而轉。轉後住_三本位_一。將_レ鏡鑄_レ像鑑照不_レ得。將_レ像鑄_レ鏡光明自新。⁽⁶⁾

の文と類似している程度である。両書の親和性は薄い。

しかし両書に用いられている共通語、類似語はいくつかある。今試みにその主なものを挙げてみると、密語、庭前柏樹子、一念万年、拄枚子、是什麼物、無影樹、瞿曇、空却以前、祖師心印、万機休罷、千聖不携、体用、正中來、偏中至、五位、心鏡絶侍、一心一切法、玲瓏八面、大圓覺、十方仏土中唯有、一乘法、三乘十二分教、祖師西來意、乾坤、天地与我同根、三世佛、微塵中、解脱門、夜中正明天曉不露、眼睛子、大地

有情、宗說俱通、脚垠洞山頂上眼睛、優曇華、珊瑚、超凡聖、寂照靈、四十九年一字不說、聞声悟道、聖諦第一義、正法眼藏涅槃妙心、石女、直指人心見性成仏、天地懸隔、不思善惡、遍界不曾藏、獅子一吼、象虎、仏向上事、見聞覺知、四大性、大地有情、草木國土、趙州老婆、甘露門、洞山三路、鳥道、玄路、摩訶般若波羅蜜、三際、超凡越聖。正位、正法、十方、山河大地、影像、諸塵三昧、面壁九年、少林、兼中至、真宗、千聖不能奈何、古德、向上、一路千聖不伝、鉄牛、本来人、主中主、玄中玄、無影像、一頭水恬牛、靈妙現前、明鏡、如何是仏、靈妙自照、沒蹤跡、因縁、徧身是手眼、日面仏月面仏、著衣喫飯、坐臥經行、是什麼物恁麼來、說似一物即不中、仏向上事、四十九年無說、平常絕待、脫體現成、穿却鼻孔、偏正曾不離本位、我與大地有情同時成道、宗通説通、尽十方世界是沙門眼、妙門全身、自身光明、八字打開、自己光明等である。

このようにいくつか共通類似語が見られるが、これは禅宗語錄一般に見られる語があるので、あえて両書を結びつける決め手にはならないと云えよう。また寂円は、「現成公案」を用いているが義雲は用いておらず、義雲は、「身心脱落」を用いているが、寂円は用いておらず、代りに「身心脱尽」なる語を用いている。と云つて両書をただ否定的関係においてのみ見てよいということにはならない。

次に機関について見てみよう。『義雲和尚語録』には、三路、四借、四賓主、五位、が見られるが、『永平秘密頂王三昧記』には、五位、三玄、三関が見られる。

五位については、『頂王三昧記』には、

正 不_レ動_ニ万物。不_レ捨_ニ纖毫。元無_ニ一位。任_レ性發_ニ機用。偏 絶氣息處。暗裏分_ニ通処。

正中來 及_ニ尽_ニ玄微。超_ニ脫功勲。無_ニ軌持_ニ 無_ニ軌則_ニ。

兼中至 不_レ論_ニ尽_ニ不_レ盡。不_レ存_ニ境_ニ不_レ境。不_ニ空劫以前事_ニ。

兼中到 脚踏_ニ實地。眼超_ニ千聖。雖_ニ然与麼。以_ニ洞照心源_ニ發_ニ内照_ニ道_ニ理表位_ニ。故五位權雖排。本是一位也。元來一人也。是即面壁底之當人也。汝等還識也。⁽⁷⁾ 参。

とあって、その立て方は石霜五位に通ずるものである。義雲引用の五位は、當時洞済で行われていた石霜五位ではない。即ち、

五位列_ニ偏正。雖_ニ然如_ニ是。立_レ正則正外無_レ偏。五位俱正中來。立_レ偏則偏外無_レ正。万物各偏中至。不_レ見_レ道。我逢_レ人則便不_レ出。出則便為_レ人。我逢_レ人則便出。出則便不_レ為_レ人。良久云。偏正不_ニ曾離_ニ本位。無生那涉_ニ語_ニ因縁_ニ。

とあって、第四位が「偏中至」で、洞曹五位を受けているようであり、當時としては極めて珍しいこととなればならないであろう。このように五位については両者は異っている所から、義雲は宏智の五位を受けていると考えられるのであるが、やはり最初は寂円から手ほどきを受けていたのである

まいか。そしてやがて義雲自身の工夫による、独創的理解へと進んだものではないかと考えられるのである。例えは四念處觀について、道元禪師の見解に対し、義雲は、

不_レ同_ニ釆迦老子。不_レ同_ニ永平師翁。山僧有_ニ四念處_ニ。且道大衆。作麼生是身念處。尽十方世界真実人体。作麼生是受念處。大海元不_レ辭_ニ衆流_ニ。作麼生是心念處。山河大地日月星辰。作麼生是法念處。說似一物即不中。不_レ涉_ニ諸心數_ニ。向上一句又作麼生。良久云。一念無念。念念不住。⁽⁹⁾ 参。

と独特の四念處觀を示しており、また宏智の「低声低声」という首山の「如何是經」に対する拈評に対して、

永平不_レ借_ニ老舌頭。欲_ニ重宣_ニ此義_ニ。良久云。舌相廣大轉_ニ此經_ニ。近聞_ニ溪澗_ニ水無_レ聲。百千妙義許_ニ誰解_ニ。風入_ニ梧桐_ニ秋始成_ニ⁽¹⁰⁾。

と声無き水が舌相広大にして此經を転ずと述べ、独自の見解を示している点からも考えられるのである。

こゝに「五位」に対する姿勢からしても、義雲の一歩進んだ曹洞的立場への自覚が見受けられるが、更に義雲が、五位を引用拈提している二つの主な上堂語は「宝慶寺」「永平寺」二会のうち、宝慶寺において行われたものである。永平寺においてはまとまつたものはなく、「洞山三路」を取り上げておいてはまとまつたものはない。「洞山三路」を取り上げておいてはまとまつたものはない。「洞山三路」を取り上げておいてはまとまつたものはない。ただ中巖和尚の自歴譜にある「洞宗の語言に通ず」とあるのがもし五位のこととすれば、少くとも永平入院後、四・五年頃までは、五位を拈提していたとも考えられる。しかしこういった事からして、『義雲和尚語録』で見る

限り、永平寺に入つてから後になるほど非常に少くなつてゐるのは事実である。

永平寺に於ける「洞山三路」について、

僧問^ニ古徳^ニ洞山有^ニ三路學。如何是鳥道。徳云。応処無^ニ蹤跡^一。糸毫不^レ礙^レ身。問如何是玄路。云。円同^ニ大虛^一。無^レ欠無^レ余。問如何是展手。云。當機的用。的用^ニ當機^一。永平老漢如何拈領。飛騰有^レ路足下無糸。未^レ著^ニ辺際^一。誰敢窺。即是鳥道。十方無^ニ壁落^ニ四面絕^ニ門闇^一。上末^レ作^ニ攀仰^一。下亦絕^ニ己^レ船^一。即是玄路。拈來也偏身手眼不^ニ曾當^一。放下也手眼通身又多許。是法住法位。世間相當然。即是展手。還有^ト不^レ涉^ニ三路^一。向上一路^ニ麼。仰^レ之高。鑽^レ之堅。珍重⁽¹¹⁾。

と辺際に著せず、壁落なく、己船を絶したところに三路があり、しかも世間相當然のところの展手が三路を超えた向上の一路あることを示して平常底の真実義を説いている。

ここに義雲は、道元禅師が五位や機関を否定しながらも、「仏經」卷に、

また高祖の三路五位は節目にて、杜撰のしるべき境界にあらず、宗旨正伝し、仏業直指せり、あへて余門にひとしからざるなり。⁽¹²⁾とする立場を永平寺において忠実に継承しながら道元禅師に接近していく姿が浮び上ってくるのである。そしてこれは他の上堂語からしても伺える事なのである。そして寂円についても義雲は師説を受けながらも独自の境界を発得し、曹洞禪^田を進一步せしめたと云うことができるであろう。

- (1) 『正法眼藏仏經』(岩波文庫本中巻)、二六二頁。
(2) 「しかるに箇箇おほくあやまりて、偏正の窟宅にして、高祖洞山大師を礼拝せんとすることを憲誠するなり。仏法もしひて仏法の道闇を行季せざるともがら、あやまりて洞山に偏正等の五位ありて人を接すといふ。これは胡説亂道なり。見聞すべからず。ただまさに上祖の正法眼藏あることを参究すべし。」『正法眼藏春秋』岩波文庫本、中巻、三八二頁。

- (3) 「義雲和尚語錄卷之上」『曹洞宗全書』語錄一、九頁。
(4) 同書、一七頁。

- (5) 『続曹洞宗全書』註解二、一四二頁。

- (6) 『曹洞宗全書』語錄一、四頁。

- (7) 『続曹洞宗全書』註解二、一二〇頁。

- (8) 「義雲和尚語錄」卷之上『曹洞宗全書』語錄一、八頁。

- (9) 「義雲和尚語錄」卷之上『曹洞宗全書』語錄一、六頁。

- (10) 「義雲和尚語錄」卷之上『曹洞宗全書』語錄一、一三頁。

- (11) 「義雲和尚語錄」卷之下『曹洞宗全書』語錄一、三二頁。

- (12) 『正法眼藏仏經』岩波文庫本、中巻、二六二頁。

道元禅師に対する義雲のこの姿勢は、若年の頃より『正法眼藏』書写にたゞさわり、六十巻『正法眼藏』の編集及び学道の指南書として重用し、參究し、嘉曆四年(元徳元年、一三

二九) 七十九歳の晩年になつてからの『品目頌』の述作にも
その帰結を見る事が出来る。⁽²⁾

以上のように、義雲は臨濟宗に対しては道元禪師と異なり、好意的である点では、瑩山禪師及び当時の曹洞宗一般と共に立場に立っている。また機関に関しては道元禪師の否定的側面とは対蹠的立場に立ちながら、肯定的側面では更に一步進めた立場に立っている。そして寂円とも少し異なり、しかしながら臨濟宗に対してははつきりと一線を画している。

宋朝禪に対する態度は、親近感を持つてゐる点では道元禪師とも異なり、当時の禪宗界一般の立場に立つてゐる。しかも孤高超脱にして只管打坐の立場に立つてゐる点では他派とも異なり、道元禪師、寂円の立場を受けつぐ独自のものといえよう。

寺中興第一世」といわれる義雲の思想的立場の一端を伺つたのである。

(1) 弘安二年(一二七九)頃から永平寺及び越前中浜新善光寺において蒐集書写している。新善光寺での書写本に「虚空」「安居」「帰依仏法僧宝」等があげられる。

(2) 「正法眼藏。密伝密付、古之与今。嫡仏嫡祖。永平元祖入宋。穿鑿五葉根蒂。帰朝能為一天之蔭涼。志懲婆心。以和字柔漢語。奇妙善巧。令人不累文言。如石含玉。似地擎山。聊綴卑語。述其大旨耳。後昆此八字不打開。妙心源未通徹。一大藏經。小林妙訣。夢也未見在矣。嘉歷四年中夏曾孫義雲和南拝書。」『正法眼藏品目頌』(『曹洞宗全書』語錄一、三五頁)によくあらわれている。

『正法眼藏』六十巻編集をめぐる問題、三代相論後の寺院経営をめぐる問題等、紙副の関係で今回は言及できなかつたが、教団史的意義のみならず、思想的にも実践的にも「永平